セメ 351
特29
433
2199

教育學養

片上菊次郎編輯

明治十四年六月出版

東京書籍

孝經國意

片上菊次郎編輯

明治十四年六月出版

東京帝國大學圖書之印

私擬國憲類纂序

凡ソ邦國ノ獨立ハ上下一致ニ在リ官民協同ニ在リ上下一致ス是ヲ以テ上意下ニ達シテ下情上ニ通ズ官民協同ス是ヲ以テ官事民ニ行ハレテ民心官ニ開ク邦國ノ獨立ヲ謀ル之ヲ措テ又何ヲ有ラン我國東洋ノ一孤島ニシテ致テ外人ト交通セズ鎖港ノ主義ヲ以テ護國ノ道ト自信シ孤立他ヲ知ラザルヤ久矣一朝外船ノ我ガ津ニ投錨シ外廷ノ我レニ交通ヲ求ムルヤ一時物論滔々歸スル所ヲ知ラザリシガ大勢ノ赴ク所ロ得テ遏止ス可カラズ天下ノ輿論開港ニ一決シ二千有餘年ノ昏醉宿夢ヲ醒覺シ竟ニ明治ノ聖代ニ逢遭シ此ノ隆治ノ雨露ニ沐浴スルヲ得ルニ及ビ來于茲十有餘年文物制度日ニ革マリ月ニ新ニシテ外交漸次親ニ內治漸々舉リ兵備教育ノ道盡サヽルヿ莫シ豈ニ之

レヲ明世ト謂ハサル可ケンヤ然リト雖モ上下一致官民協同ハ
區々タル文物制度ノ改良ノミヲ以テ之ヲ致ス可キモノニ非ズ
必ラスヤ立憲政体ヲ確立シ國憲ヲ緯トシ國會ヲ經トシ上下相
依リ官民相近カサル可カラサルナリ　聖天子夙ニ茲ニ賢慮ア
ラセ給ヒ明治八年四月十四日ヲ以テ元老大審ノ兩院ヲ設置セ
ラレ尋テ立憲政体ヲ確立アラセラレントノタマヒタリ此ノ時
ニ當リ我カ神州三千五百萬ノ兄弟誰レカ之レニ感泣セサルモ
ノアランヤ皆ソノ一日モ速ニ確立ノ命アランヿヲ期セリ然リ
ト雖モ民智未タ進マズ未タ此ノ時機ニ達セス而シテ明治十二
年ノ冬ニ及ヒ國會設立ノ請願アリ國會可開ノ建白アリ是レ蓋
シ明治八年ノ聖詔ニ胚胎スル所ナランカ今也已ニ十四年ノ夏
ナリ明治八年ヲ經ル又六年時運ノ歸スル何人カ之ヲ支ヘン苟

クモ心ヲ國事ニ注クモノ皆ナ國憲ヲ嘖々シ之レヲ制定シテ以
テ國會ニ及ホサントス余深ク茲ニ感アリ乃チ日々新聞社説ナ
ル國憲意見交詢社員ノ草案ナル私擬憲法及ヒ共存同衆ノ草案
私擬憲法意見ヲ類纂シ之ヲ江湖ニ頒布シ吾黨ノ人ニ告ケント
ス是レ上下一致官民協同ノ捷徑ニシテ今日ノ急務之ヲ制定ス
ルニ勝レタルモノアラザルナリ刻成ルニ迨ヒ記シテ序トス

明治十四年夏六月

霞島散人識

國憲意見

第一章　帝室

皇統ハ神種ナリ我日本國ノ帝位ハ天照大御神ノ御子孫ノミ天日繼ニ立セ給フベキ事

皇嗣ヲ定ムルハ叡慮ノ隨ナリト雖モ皇嫡ヲ以テ皇太子ニ立テ給フヲ國例トス皇子ナケレバ皇女若シクハ親王ヲ皇嗣ニ立テ給フベシ若シ御遺言ナキ時ハ上院ノ國議ヲ以テ諸親王ノ中ヲ撰ビ皇統ヲ繼ガセ參ラスベキ事

帝室ハ申スニ及バズ皇族ノ歲費ハ必ラズ相當ニ國庫ヨリ之ヲ供奉スベキ事

皇族ハ三世ニシテ止ム四世以下ハ姓ヲ賜フテ人臣ニ列セラルベシ三世以內ハ姓ヲ賜フト雖モ皇族ニ列セラルベキ事

第二章　公法

凡ソ日本國民ハ其族籍其位階ノ別ヲ問ハズ法律ニ對シテハ同等ノ權理タルベキヿ

日本國民ハ其資產ノ厚薄ニ應シテ國用ノ支給ヲ負擔スベキヿ

日本國民ハ文武ノ官職ニ就クニ同等ノ權理ヲ有スベキヿ

一日本國民ノ自由ハ同一ノ保護ヲ受クベシ法律ノ正示スル所非ザレバ甲乙ノ別ヲ論ゼズ逮捕糺彈處刑ヲ被ル可カラズ且ツ一タヒ處斷ヲ得タルヿニ再度ノ糺彈ヲ受クベカラザルヿ

日本國民ハ自由ニ其歸依スル所ノ宗教ヲ信仰シ各宗同一ノ保護ヲ受クベキヿ

日本國民ハ法律ニ抵觸セザル限ハ自由ニ其意見ヲ演說シ自由ニ其意見ヲ印行スルノ權理アルベキヿ

日本國民ノ財產ハ其所有權ヲ擾亂スベカラザルヿ

日本政府ハ法律ヲ以テ明示シタル公共利益ノ事業ノ爲メニハ至當ノ償ヲ出シテ國民ノ所有ヲ割カシムルヲ得ベキヿ

日本國民ハ法律ヲ以テ定メタル陸海軍ノ兵役義務ヲ負擔スベキヿ

第三章　政府

天皇ハ至尊ナリ神聖ナリ法ヲ以テ問ヒ奉ルベキニ非ズ萬機ノ政治ニ關シ國民ニ對シテ大臣ソノ責ニ任ズベキ事

行政ノ大權ハ　天皇ノ獨リ掌握シ給フ所ナリ　天皇ハ國政ヲ主宰シ陸海ノ兵權ヲ總ヘ給フベシ外ニシテハ開戰ヲ宣ヘ和議ヲ講シ同盟貿易ノ條約ヲ結ビ內ニシテハ百官有司ヲ敘任シ法律ヲ實施スル方法順序ヲ定ムルヿ皆　叡慮ニ在ルベシ然レ

御獨斷ヲ以テ現行ノ法律ヲ廢止シ制定ノ法律ヲ施行セザルヿ
アラセ給フヘカラザル事

立法大權ハ　天皇ノ上院下院ト相俱ニ合掌シ給フ所ナリ之ヲ
立法三部ト名ク法律ヲ立案スルノ權ハ三部皆與ニ之ヲ有スル
トス但シ租稅及ビ會計ニ關スルノ議案ハ先ズ之ヲ下院ノ議決
ニ付スヘキ事

凡ソ法律ハ上下兩院ニ於テ各々自由ニ之ヲ審議シ各々其衆議
ヲ以テ可否ヲ決スヘキ事

法律ヲ布告スルノ大權ハ　天皇ノ獨リ掌握シ給フ所タルヘキ
事

第四章　上院

上院ハ立法官ノ一要部ナリ其議會ハ皇族及ビ華族二十名國老

四十名ヲ以テ組織スヘキ事

上院ハ毎歲必ラズ　勅命ヲ以テ下院ト同時ニ開キ給フヘシ下
院ヲ開カレザル間ハ上院ノ議決ハ國民ニ對シテ無効タルヘシ
但シ糺彈裁判ノ爲ニ上院ヲ開クハ其法廷ノ資格タルヲ以テ此
限ニアラザルヘキ事

皇族　滿廿一歲以上ノ男子ニシテ文武ノ常職ヲ帶ビサセラレ
ザル方々ハ親カラ上院ノ議席ヲ占メ給フノ特權アリ其數ヲ限
リ參ラセザルヘキ事

華族　滿廿一歲以上ノ男子ハ其族中ヨリ廿名ノ代議士ヲ選擧
シ華族議員トシテ上院ニ出頭セシムルノ特權アリ被選人ハ滿
廿五歲以上ニシテ文武ノ常職ヲ帶ビザルモノニ限ルヘシ此華
族議員ノ在職ハ四年間ト定メ二年毎ニ其半數ヲ改選セシムヘ

キ事

國老　滿三十歳以上ノ男子ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿二年以上其地ニ居住シ地租ヲ拂ヒ文武ノ常職ヲ帶ビズ應選ノ資格ヲ備フルモノタルヘシ府縣會ハ其會議ニ於テ其議員中ヨリ若クハ議員外ヨリ各々國老一名ヲ選擧シ其府縣ノ國老トシテ上院ニ出頭セシムヘシ其在職ハ四年間ト定メ二年毎ニ其半數ヲ改選セシムヘキ事

上院ハ皇室ニ對スル重罪國事ニ關スル重罪ヲ裁判シ皇族華族ノ犯罪ヲ裁判シ大臣失職ノ罪ヲ裁判スルノ高等法院タルヘキ事

華族ニ封列セラルヽハ天皇ノ大權ニ在リテ其數ヲ限ラザルナリ華族ニ等級ヲ立テ或ハ世襲ニ封シ或ハ終身ニ封セラルヽ都

テ叡慮ニ任セ奉ルヘキ事

第五章　下院

下院ハ立法官ノ一要部ナリ其議會ハ日本國民ヨリ直ニ選擧セラレタル代議士百四十名ヲ以テ組織スヘキ事

下院ノ議員タルモノハ滿廿五歳以上ノ男子ニシテ地租ヲ納メ文武ノ常職ヲ帶ビズ應選ノ資格ヲ備フルモノタルヘシ但シ其半數ハ必ズ選擧府縣内ニ本籍ヲ定メ滿二年以上其地ニ居住スルモノタルヘシ其在職ハ四ケ年間ト定メ二年毎ニ其半數ヲ改選セシムヘキ事

下院議員ノ選擧人ハ滿廿一歳ノ男子ニシテ其府縣内ニ居住シテ地租ヲ納メ其他選擧ノ資格ヲ備フルモノニ限ルヘキ事

下院ハ毎歳必ラズ勅命ヲ以テ上院ト共ニ同時ニ開キ給フヘシ

天皇ハ上下兩院ノ議決ヲ不認可シ其議會ヲ中止シ紛議アルニ當テハ其議員ニ解散ヲ命シ給フノ大權アリトス然レトモ此場合ニ當リテハ必ズ直ニ之ヲ再議セシメ必ラズ三月間ニ之ヲ再開シ必ラズ三月間ニ新議員ヲシテ議會ヲ組織セシメ給フヘキ事

下院ノ議長ハ議員ノ中ヨリ之ヲ公選スヘキ事

兩院ノ議決ヲ經テ天皇ノ御硃批准ヲ得ルニ非ザレバ如何ナル細瑣ノ租稅タリトモ之ヲ國民ニ賦課スヘカラザル事

開議中及ビ會議ノ前後一ケ月ノ間ハ議員ヲ抑制シ勾引シ若シクハ之ヲ勾留スルヿアルヘカラズ又開議中ハ現行犯罪ノ外ハ會議ノ許諾ヲ得ルニ非ザレバ議員ヲ逮捕シ糺彈スルヲ得ヘカラザル事

兩院ニ呈スルノ請願建議ハ必ラズ書面ヲ以テスヘシ自カラ議

院ニ口陳スルヲ許サヽルヘキ事。

第六章　內閣大臣

內閣大臣ハ　天皇ヲ補佐シ奉リテ樞機ヲ司ドルノ重職ナリ

天皇ニ代リ國民ニ對シテ其責ニ任ズベキ事

內閣大臣ハ上下兩院ノ議員ヨリ兼任セラルヽヲ得ベシ且ツ議員ヨリ兼任セザルニ大臣ハ何時ニテモ兩院ノ議席ニ就キ意見ヲ陳述スルヲ得ヘシ但シ議決ノ數ニ與ルヲ得ザルヘキ事

內閣大臣ニ失職ノ犯罪過失アル時ハ下院ハ之ヲ糺彈スルノ權アリ或ハ其糺彈ヲ上院ニ請求スルノ權アルヘシ然レトモ其裁判ハ高等法院タル上院ノ特有スル所タルヘキ事

第七章　司法

司法ノ大權ハ　天皇ノ掌握シ給フ所ナリ凡ソ民刑ノ裁判ハ裁

判官　天皇ノ命ヲ奉行スル者トスヘキ事

裁判官ハ勅奏判任ノ別ナク皆　天皇ノ命シ給フ所ナリ其官ハ終身官タルヘキ事

國民ノ訟ヲ聽キ罪ヲ斷ズルハ法律ヲ以テ定メタル裁判所ニ於テ裁判官コレヲ奉行スヘシ如何ナル場合タリトモ臨時若クハ特別ノ裁判所ヲ開キ臨時若クハ特別ノ裁判官ヲ命シテ聽訟斷罪ノ事ヲ行ハシムヘカラザル事

罪犯ノ訊問辯論ソノ事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アルモノヲ除クノ外ハ之ヲ公行シ裁判言渡ハ都テ之ヲ公行スヘシ否ラザルトキハ其言渡ノ効ナカルヘキ事

裁判所ハ被告人ガ辯論ノ爲ニ辯護人ヲ用フルヿヲ得セシムヘシ陪審ヲシテ罪ヲ斷ゼシムヘシ辯護人ヲ許サズ陪審ヲ置カザルノ裁判ハ其効ナカルヘキ事

天皇ハ刑ヲ特赦シ刑ヲ減等スル大權ヲ有シ給フヘキ事

第八章　特法

勳位ニ叙シ綬章ヲ賜フハ　天皇ノ大權ナリ叙賜ノ次第禮遇ノ制度等都テ　勅裁ニ依ルヘキ事

復權ハ　天皇ノ大權ナリ凡ソ重罪ノ刑ニ處セラレ終身其公權ヲ剝奪セラレタルモノハ大赦若クハ特赦ニ因テ免罪ヲ得ルモ復權ハ　勅裁ニ非ザレハ之ヲ得ヘカラサル事

凡ソ陸海ノ軍人ハ在職中ハ云フヿ及ハズ罷職停職ト雖ヒ其官位勳等ヲ帶ヒ例ニ依リテ恩給ヲ賜ハルノ恩榮ヲ有スヘキ事

國債ハ國家ノ負債ナリ如何ナルヿアリヒ政府ハ債主ニ對シテ其約ニ違フヿアルヘカラザル事

北海道千島沖繩縣並ニ屬地屬島ハ當分ノ間ハ內地ニ異ナルノ制度ヲ以テ統御セラルヘキ事

府縣會ハ特別ノ國法ヲ以テ其綱領ヲ制定セラルヘシ府縣ノ自治ハ之ヲ妨碍スヘカラサル事

國民ハ請願ヲ爲シ若クハ建議ヲ爲シ若クハ事ヲ論シ志ヲ述ヘンガ爲メニ平穩ナル社ヲ結ヒ或ハ集會スルノ權理アルヘシ但シ此權理ハ公利ヲ論シ公益ヲ謀リ若クハ自由ヲ保ツノ權理ナリト雖ヒ法律ニ於テ禁止セラレザル區域ニ限ルヘキ事

國民ハ公衆ノ利害ニ關スルニ付キ其意見ヲ建議シ若クハ一個人或ハ數人ノ權理自由利益ヲ保護スルヿニ付キ請願ヲ爲スノ權理アルヘキ事

國民ハ政治ニ關シテ其思想ヲ公衆ニ演說シ或ハ著書新聞紙ヲ

以テ論出スルノ自由アルヘシ但シ其言論ハ法律ニ於テ禁止セザル區域ニ限ルヘキ事

天皇ハ此ノ國約憲法ヲ守ラセ給フ御事ヲ誓ハセ給フヘシ御代々ノ天皇ハ御卽位ノ初ニ同ノ御誓アラセ給ヘキ事

私擬憲法案緒言

頃日國内至ル所人々國會開設ノ邦國ニ急務ナルヲ說キ開設ノ一事ニ至テハ殆ト異議ヲ容ルモノ無キカ如シ然リ而シテ國會開設ノ日如何ノ憲法ヲ制定アランニハ以テ邦國ノ安寧ヲ永遠ニ保持シ其權利ヲ天下ニ伸暢シ得ヘキヤニ至テハ寥々聞ク所無キカ如シ蓋シコレアラン然ルモ或ハ之ヲ腦裏ニ藏メ或ハ之ヲ筐底ニ埋メ偶マ之ヲ吐露スルモノト雖ヒ一二重要條件ニ就キ其意見ノ一班ヲ示スニ過キサレハ未タ其全豹ヲ知ルヿ能ハズ抑モ憲法ノ事タルヤ至大至重其一字一句ハ皆以テ億兆ノ衆庶休戚ノ由テ生スル所ナレハ輕忽ニ之ヲ言フヘカラサルハ固ヨリ論ヲ待タサル所ナリ是レ憲法ノ議論寥々世ニ聞ヘナキ所以ナランカ余輩亦之ヲ知ラサルニ非スト雖ヒ今ヤ黨論未タ分

レス心情未タ熱沸セス此際憲法ノ條件ニ就キ虛心平氣互ニ其意見ヲ吐露シ一章ヲ定メ一句ヲ作リ以テ國安ヲ保持シ國權ヲ伸暢スルノ方策ヲ論究シ豫メ人心ノ向フ所ヲ定ムルハ今ノ時ヲ措テ亦何レノ日ソ是レ余輩カ輕忽ノ罪ヲ顧ミス私ニ憲法案一篇ヲ擬草シ以テ親友知己ニ頒タントスル所以ノ微意ナリ親友知己幸ニ其謬迷ヲ示シ其缺ヲ補ヒ其剛ヲ刪リ以テ憲法ノ主議ヲ明晰ニシ餘蘊ナキニ至ラシメナハ豈ニ獨リ余輩ノ幸慶而已ナランヤ

編者某々記

第一章　皇權

第一條　天皇ハ宰相並ニ元老院國會院ノ立法兩院ニ依テ國ヲ統治ス

第二條　天皇ハ聖神ニシテ犯ス可ラザルモノトス政務ノ責ハ宰相之ニ當ル

第三條　日本政府ノ歲出入租稅國債及諸般ノ法律ハ元老院國會院ニ於テ之ヲ議決シ天皇ノ批准ヲ得テ始テ法律ノ効アリ

第四條　行政ノ權ハ天皇ニ屬シ行政官吏ヲシテ法律ニ遵ヒ總ヲ其事務ヲ執行セシム

第五條　司法ノ權ハ天皇ニ屬シ裁判官ヲシテ法律ニ遵ヒ凡テ民事刑事ノ裁判ヲ司ラシム

第六條　天皇ハ法律ヲ布告シ海陸軍ヲ統率シ外國ニ對シ宣戰

講和ヲ爲シ條約ヲ結ヒ官職爵位ヲ授ケ勳功ヲ賞シ貨幣ヲ鑄造シ罪犯ヲ宥恕シ元老院國會院ヲ開閉シ中止シ元老議員ヲ命シ國會院ヲ解散スルノ特權ヲ有ス但海關稅ヲ更改スルノ條約ハ預メ之ヲ元老院國會院ノ議ニ附スヘシ

第七條　天皇ハ內閣宰相ヲ置キ万機ノ政ヲ信任スヘシ

第二章　內閣

第八條　內閣ハ各省長官內閣顧問ヲ以テ之ヲ組成ス

第九條　內閣宰相ハ協同一致シ內外ノ政務ヲ行ヒ連帶シテ其責ニ任スヘシ但シ其事一宰相ノ處置ニ出テ他ノ宰相ニ關セサルモノハ此ノ限ニアラス

第十條　內閣中首相一人ヲ置キ上裁ヲ經タル諸法律並ニ政令ハ其名ヲ署シテ之ヲ布告スヘシ

第拾壹條　內閣ノ議決定セサルトキハ首相之ヲ決シテ上裁ヲ仰クヲ得ヘシ

第拾二條　首相ハ天皇衆庶ノ望ニ依テ親シク之ヲ撰任シ其他ノ宰相ハ首相ノ推薦ニ依テ之ヲ命スヘシ

第拾三條　內閣宰相タルモノハ元老議員若シクハ國會議員ニ限ルヘシ

第拾四條　政府ノ歲入出豫算ノ議案ハ必ス內閣之ヲ起草スヘシ

第拾五條　內閣ヨリ出ス所ノ議案ハ先ツ之ヲ國會院ノ議ニ附シ議決ノ後該院之ヲ元老院ニ移シテ其議ニ附スヘシ

第拾六條　內閣ハ每年前年度ノ歲出入計算及其施行シタル事務ノ要領ヲ元老院國會院ニ報告シ且時々緊要ナル內政外交ノ

景況ヲ兩院ヘ報告スヘシ

第拾七條　內閣ノ意見立法兩院ノ衆議ト相合セサルトキハ或ハ內閣宰相其職ヲ辭シ或ハ天皇ノ特權ヲ以テ國會院ヲ解散スルモノトス

第三章　元老院

第拾八條　元老院ハ國會院ト共ニ政府ノ歲出入租稅國債及諸般ノ法律ヲ議決スル所トス

第拾九條　元老議員ハ特撰議員ト公選議員トヨリ成立スルモノトス

第二十條　特撰元老議員ハ皇族華族及嘗テ重要ノ官ニ在リシ者學識アル者ノ中ヨリ天皇之ヲ親撰シ過失アルニ非サレバ終身其職ニ居ルモノトス但其人員ハ元老議員ノ總數三分ノ二ヲ

過クル可ラス

第二拾一條　公撰元老議員ハ每元老議員撰舉區ヨリ各二人ヲ撰舉シ四年每ニ改撰スヘシ

第二拾二條　各府縣ノ管轄地ヲ以テ元老議員一撰舉區ト爲シ一區內國會議員撰舉權ヲ有スル者ヲシテ元老議員撰舉人二百名ヲ撰舉セシメ此二百名ノ公選ヲ以テ元老議員各二名ヲ撰舉スヘシ

第二拾三條　日本國民ニ生レ年齡滿三拾歲以上ノ男子ハ左ニ記載スル者ヲ除クノ外凡ソ何レノ撰舉區ヲ問ハス其被撰候補トナリ元老議員ニ撰舉セラルヽヲ得ヘシ但シ府知事縣令郡區長及元老議員撰舉掛ハ其撰舉區內ニ被撰候補タルヲ得ス

處刑中ノ者

嘗テ重罪ヲ犯シ未タ政權ヲ復セラレサルモノ及身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

白痴及風癲ヲ病ム者

日本國內ニ住居セサル者

判事及判事補

神官僧侶

第貳拾四條　元老議員ハ特撰ノモノト雖モ日本國民ニ生レテ日本國內ニ住居スル者ニシテ皇族ハ年齡滿二十五年其他ハ滿三十年以上ノモノニ限ルヘシ

第貳拾五條　各省長次官內閣顧問侍從長諸寮長及罷職將官ヲ除キ其他ノ官吏ニシテ特撰若クハ公撰元老議員ト爲ル者ハ其官ヲ辭スヘシ又元老議員ニシテ以上諸官ヲ除キ其他ノ官吏ニ

任セラレタル者ハ議員ヲ辭スヘシ

第二拾六條　元老院議員タル者ハ其在職中國庫ヨリ毎年三千圓ヨリ少カラサル俸給ヲ受クヘシ

第二十七條　元老議員ハ重輕罪ヲ犯シタルニ非サレハ元老院ノ會期中及其前後各三十日間之ヲ拘引スルヲ得ス又其會議中ノ演說言論ハ自カラ之ヲ出版公布スルニ非サレハ該議院外ニ於テ之ヲ罪スルヲ得ズ

第二十八條　元老院ハ國會院ノ彈劾ニ依テ行政及司法官吏ノ國事犯及職務上ノ過失ヲ審問シ出席議員三分ノ二以上ノ同意ニ依テ有罪ト決スレハ奏聞ノ上天皇ノ命ヲ以テ其職ヲ免スヘシ但シ有罪ト決セラレタル者ハ再ヒ他ノ裁判所ニ於テ法律ニ從ヒ之ヲ審問シテ刑罰ニ附スルヲ得ヘシ

第貳拾九條　元老院ハ詔敕ヲ以テ國會院ト同時ニ於テ之ヲ開閉スヘシ

第三拾條　元老院ハ四年毎ニ其議長副議長ヲ議員中ヨリ公撰シ奏聞ノ上天皇之ヲ命スヘシ

第三拾一條　凡ソ事ヲ議決スルニハ出席議員ノ過半數ニ依ルヘシ但シ可否數相同シキトキハ議長之ヲ決スヘシ

第三拾二條　元老院ハ其議員總數過半ノ同意ヲ以テ其議事規則ヲ議定シ上裁ヲ經テ之ヲ施行スヘシ

第三拾三條　元老院ハ其議事規則中ニ相當ノ罰則ヲ設ケテ議事規則ヲ犯シタル議員ヲ罰スルヲ得ヘシ

第三拾四條　議事ハ總テ傍聽ヲ許スヘシト雖ヒ議事規則ヲ以テ其數ヲ限リ或ハ臨時ニ之ヲ禁スルヲ得ヘシ

第三拾五條　元老院ハ其議員ノ出席全員五分ノ一ニ滿タサレハ會議ヲ開クヲ得ス

第三拾六條　元老院ハ其ノ都合ニヨリ休會ヲ爲スヲ得ヘシト雖ヒ國會院ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ十日以上ノ休會ヲ爲スヲ得ス

第三拾七條　元老院ハ其ノ議事錄ヲ作リテ時々之ヲ印行スヘシ但シ其印行スヘカラスト思考スルモノハ此ノ限ニ非ス

第三拾八條　本院議決ノ議案ニシテ未タ國會院ノ議決ヲ經サルモノ及國會院ヨリ移シタル議案ニシテ本院ノ脩正ヲ加ヘタルモノハ之ヲ國會院ニ移シ該院議決ノ後ヲ兩院議長ヨリ天皇ニ奏聞シテ上裁ヲ仰クヘシ

第四章　國會院

第三拾九條　國會院ハ元老院ト共ニ政府ノ歳出入租稅國債及諸般ノ法律ヲ議決スル所トス

第四拾條　國會議員ハ全國人民中撰擧權ヲ有スル者ノ公撰スル所ニシテ四年間其職ニ在ルモノトス

第四拾壹條　國會議員ノ撰擧區ハ各州ヲ以テ一區若シクハ數區ニ別チ人口八万人毎ニ一人ノ割ヲ以テ公撰スルモノトシ八万人ニ滿タザル端數四万人ニ滿ル分ハ同シク一人ヲ公撰シ四万人ニ滿タザル分ハ之ヲ除クヘシ但シ一州ヲ成スモノニシテ人口二万ニ滿ル分ハ一人ヲ公撰スヘシ

第四拾貳條　人口二万人以上ノ都市ハ別ニ一選擧區トナシ一區二万人以上四万人以下ハ各一人ヲ公選シ四万人以上八万人以下ハ各二人ヲ公選シ八万人以上ハ六万人ヲ增ス毎ニ各一人ヲ公選スヘシ

第四拾三條　國會議員撰擧人名調査ノ期限ニ其撰擧區內ニ於テ郡村ハ地稅金五圓以上ヲ納ムヘキ土地ヲ所有シ若シクハ價直金二百圓以上ノ所有家屋ニ住居シ人口三千以上ノ都市ハ地稅金三圓以上ヲ納ムヘキ土地ヲ所有シ若シクハ價直金二百圓以上ノ所有家屋ニ住居シ又ハ價直金四百圓以上ノ家屋ヲ既ニ十三ケ月借住シテ其年齡滿二十一歳ニ達シタル男子ハ左ニ記載スル者ヲ除キ總テ其ノ撰擧區內ノ撰擧人タルノ權ヲ有スヘシ

處刑中ノ者

嘗テ重罪ニ處セラレ未タ政權ヲ復セラレサルモノ及身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

白痴及風癲ヲ病ム者

第三拾九條　國會院ハ元老院ト共ニ政府ノ歳出入租稅國債及諸般ノ法律ヲ議決スル所トス

第四拾條　國會議員ハ全國人民中撰擧權ヲ有スル者ノ公撰スル所ニシテ四年間其職ニ在ルモノトス

第四拾壹條　國會議員ノ撰擧區ハ各州ヲ以テ一區若シクハ數區ニ別チ人口八万人毎ニ一人ノ割ヲ以テ公撰スルモノトシ八万人ニ滿タザル端數四万人ニ滿ル分ハ同シク一人ヲ公撰シ四万人ニ滿タザル分ハ之ヲ除クヘシ但シ一州ヲ成スモノニシテ人口二万ニ滿ル分ハ一人ヲ公撰スヘシ

第四拾貳條　人口二万人以上ノ都市ハ別ニ一選擧區トナシ一區二万人以上四万人以下ハ各一人ヲ公選シ四万人以上八万人以下ハ各二人ヲ公選シ八万人以上ハ六万人ヲ增ス毎ニ各一人ヲ公選スヘシ

第四拾三條　國會議員撰擧人名調査ノ期限ニ其撰擧區內ニ於テ郡村ハ地稅金五圓以上ヲ納ムヘキ土地ヲ所有シ若シクハ價直金二百圓以上ノ所有家屋ニ住居シ人口三千以上ノ都市ハ地稅金三圓以上ヲ納ムヘキ土地ヲ所有シ若シクハ價直金二百圓以上ノ所有家屋ニ住居シ又ハ價直金四百圓以上ノ家屋ヲ既ニ十二ケ月借住シテ其年齡滿二十一歳ニ達シタル男子ハ左ニ記載スル者ヲ除キ總テ其ノ撰擧區內ノ撰擧人タルノ權ヲ有スヘシ

處刑中ノ者

嘗テ重罪ニ處セラレ未タ政權ヲ復セラレサルモノ及身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

白痴及風癲ヲ病ム者

日本國內ニ住居セサル者
判事及判事補
府知事縣令及國會議員撰舉掛
神官僧侶

第四十四條　日本國民ニ生レ年齡滿二拾五歲以上ノ男子ハ左ニ記載スル者ヲ除クノ外凡ソ何レノ撰舉區ヲ問ハス其被撰候補ト爲リ國會議員ニ撰舉セラルヽヲ得ヘシ但シ府知事縣令郡區長及國會議員撰舉掛ハ其撰舉區內ニ被撰候補タルヲ得ス

處刑中ノ者
嘗テ重罪ヲ犯シ未タ政權ヲ復セラレサルモノ及身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
白痴及風癲ヲ病ム者

日本國內ニ住居セサル者
判事及判事補
神官僧侶

第四拾五條　各省長次官內閣顧問侍從長及諸寮長ヲ除キ其他ノ官吏ニシテ國會議員ニ當撰シタル者ハ其官ヲ辭スヘシ又國會議員ニシテ以上ノ諸官ヲ除キ其他ノ官吏ニ任セラレタル者ハ議員ヲ辭スヘシ

第四拾六條　國會議員ノ中欠員アルトキハ其補欠議員ヲ公選スヘシ

第四拾七條　國會議員ハ其在職中國庫ヨリ每年三千圓ヨリ少カラサルノ俸給ヲ受クヘシ

第四拾八條　國會議員タル者ハ重輕罪ヲ犯シタルニ非サレハ

國會院會期中及其前後各三十日間之ヲ拘引スルヲ得ス又其會議中ノ演說言論ハ自カラ之ヲ出版公布スルニ非サレハ該議院外ニ於テ之ヲ罪スルヲ得ス

第四十九條　國會院ハ內閣宰相其他行政及司法官吏ノ國事犯及職務上ノ過失ヲ彈劾スルヲ得ベシ

第五十條　總テ租稅ニ關スル議案ハ本院若シハ內閣ノ他之ヲ起草スルヲ得ス又其議案ハ元老院ニ於テ之ヲ修正スルヲアルモ本院之ヲ再議シ出席議員三分二以上ノ同意ヲ以テ之ヲ決スレハ其決議ノ元老院修正ト一致スルト否トヲ問ハス直ニ本院議長ヨリ上裁ヲ仰クヲ得ヘシ

第五拾一條　國會院ハ每年必ス一度ノ定期會ヲ開キ事若シ急施ヲ要スルトキハ臨時會ヲ開クヲアルベシ

第五拾二條　國會院ハ第六條ニ依リ之ヲ解散スルヲアルモ解散ノ後九十日以內ニ其議員ヲ改撰シテ會議ヲ開クヲ可シ

第五拾三條　國會議員ノ議長副議長ハ議員中ヨリ公撰シ奏聞ノ上天皇之ヲ命スルモノトス

第五拾四條　凡ソ事ヲ議決スルハ出席議員ノ過半數ニ依リ可否ノ數相同シキトキハ議長之ヲ決スベシ

第五拾五條　國會院ハ其議員總數過半ノ同意ヲ以テ其議事規則ヲ議定シ上裁ヲ經テ之ヲ施行スヘシ

第五拾六條　國會院ハ其議事規則中ニ相當ノ罰則ヲ設ケテ議事規則ヲ犯シタル議員ヲ罰スルヲヲ得ヘシ

第五拾七條　國會議員ノ中非法ノ撰擧ヲ受ケ議員トナリタルモノアレハ本院審査シテ之ヲ退ケルヲ得ベシ

第五拾八條　國會院ハ其ノ議員總數三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ議員中罪ヲ犯シテ其体面ヲ辱シメタル者ヲ退職セシムルヲ得ベシ

第五拾九條　議事ハ總テ傍聽ヲ許スベシト雖モ議事規則ヲ以テ其數ヲ限リ或ハ臨時ニ之ヲ禁スルヿヲ得ベシ

第六拾條　國會院ハ其議員出席全員五分ノ一以上ニ至ラサレハ會議ヲ開クヿヲ得ス

第六拾壹條　國會院ハ其都合ニ依テ休會ヲ爲スヿヲ得ヘシト雖モ元老院ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ十日以上ノ休會ヲ爲スヿヲ得ス

第六拾二條　國會院ハ其議事錄ヲ作テ時々之ヲ印行スベシ但シ其印行スベカラストト思考スルモノハ此限ニアラズ

第六十三條　本院議決ノ議案ニシテ元老院ノ議決ヲ經サルモノ及ヒ元老院ヨリ移シタル議案ニシテ本院ノ修正ヲ加ヘタルモノハ之ヲ元老院ニ移シ該院議決ノ後兩院議長ヨリ天皇ニ奏聞シテ上裁ヲ仰クベシ

第五章　裁判

第六拾四條　裁判ハ總テ法律ヲ以テ定メタル裁判所ニ於テ法律ニ遵ヒ裁判官之ヲ司ル可シ特別ノ裁判所ヲ開キ特別ノ裁判官ヲ命シテ裁判ヲ司ラシムヘカラズ

第六拾五條　裁判官ハ凡テ天皇ノ命スル所ニシテ過失アルニアラサレハ終身其職ニ在テ其俸給ヲ受ルヲ得ヘシ

第六拾六條　裁判所ニ於テノ訊問辨論及裁判宣告ハ總テ之ヲ公行スヘシ否ラサレハ裁判ノ効無シ但其事件風俗ヲ壞ルノ恐

レアルモノニ限リ訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヿヲ得ヘシ

第六拾七條　裁判ハ總テ刑事被告人ヲシテ辯護人ヲ用フルヿヲ得セシムヘシ辯護人ヲ許サヽルモノハ裁判ノ効無シ

第六拾八條　軍律ヲ犯ス者ハ陸海軍裁判所ニ於テ之ヲ裁判スヘシ

第六章　民權

第六拾九條　日本國民ハ國安ヲ妨害スルヿ非サレハ各自所信ノ教法ヲ奉スルノ自由ヲ有ス

第七拾條　日本國民ハ國安ヲ妨害シ若シクハ人ヲ誣謗スルヿ非サレハ其意見ヲ演說シ及ヒ出版告布スルノ自由ヲ有ス

第七拾壹條　日本國民ハ兵器ヲ携ヘスシテ靜穩ニ集會シ又其疾苦ヲ政府ニ訴フルノ權ヲ有ス

第七拾二條　日本國民ノ財產所有ノ權ハ決シテ之ヲ侵スヿヲ得ス若シ公共ノ用ニ供スルヿアルモ相當ノ償ヲナスヘシ

第七拾三條　日本國民ハ現行犯罪ヲ除クノ外法律ニ遵テ裁判官ノ發シタル命狀ヲ示スニアラサレハ之ヲ拘引シ若シクハ其家屋ニ侵入シ其物件書類ヲ搜索シ若シクハ之ヲ持去ルヘカラス

第七拾四條　日本國民ハ拘引ノ後四十八時間ヲ出スシテ裁判官之ヲ訊問スヘシ若シ其時間ヲ經過シ裁判官令狀ヲ發シテ拘留セシムルニアラサレハ之ヲ釋放スヘシ

第七拾五條　日本國民ハ罪狀未決中保証人ヲ設ケ相當ノ保証金ヲ出シテ保釋ヲ受ルヿヲ得ヘシ但被告人ノ逃遁若クハ罪證ヲ隱滅スルノ恐アルモノハ此限ニアラス

第七拾六條　日本國民ハ拷問ヲ用テ自カラ其罪ヲ白狀セシメラルヽ事無カルヘシ

第七拾七條　日本國民ハ其族籍爵位ヲ別タズ同一ノ法律ニ依テ其自由權理ノ保護ヲ受ク可シ

第七十八條　既往ニ溯リテ施行スヘキ法律ハ制定スヘカラス但制定ノ法律ニ依テ罪ノ輕減若クハ消滅ス可キモノハ其法律ニ從フヘシ

第七章　憲法改正

第七拾九條　此憲法ハ元老院國會院各其議員總數三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ之ヲ改正シ天皇ノ上裁ヲ仰ク可シ但皇權ニ關スルノ條ハ勅許ヲ得タルノ後ニ非サレハ改正ノ會議ヲ開クヲ得ズ

私擬憲法意見第二篇

皇帝

第一款　帝位相續

第一條　日本國ノ帝位ハ神武天皇ノ正統タル今上皇帝陛下ノ皇裔ニ世傳ス其相續スル順次ハ必ス左ノ條款ニ從フ

第二條　今上皇帝ノ皇位ハ嫡皇子及ヒ其統ニ世傳シ其統ナキ時ハ嫡衆子及ヒ其統ニ世傳シ其統ナキ時ハ庶皇子及ヒ其統ニ世傳ス以上ノ統ナキ時ハ嫡庶皇女及ヒ其統ニ世傳ス

第三條　若シ嫡皇子孫庶皇子孫及ヒ其統ナキ時ハ皇帝ノ兄弟姉妹及ヒ其統ニ世傳ス

第四條　皇帝ノ嫡庶子孫兄弟姉妹及ヒ其統ナキ時ハ皇帝ノ伯叔父母(注)皇帝ニ皇位ヲ傳ヘタル父ヲ云フ及ヒ其統ニ世傳ス若シハ母ノ兄弟姉妹ヲ云フ

第五條　皇帝ノ嫡庶子孫兄弟姉妹伯叔父母及ヒ其統ナキ時ハ皇族中當世ノ皇帝ニ最近ノ血緣アル者ヲシテ帝位ヲ繼受セシ[illegible]

第六條　以上承繼ノ順序ハ總テ男ハ女ニ先ダチ長ハ幼ニ先ダチ嫡ハ庶ニ先ダツ[illegible]

第七條　特殊ノ時機ニ逢ヒ帝位相續ノ順次ヲ超ヘテ次ノ相續者ニ傳フルヲ必要トスルトキハ皇帝ハ其方案ヲ國會ニ出シ議員三分二以上ノ可決アルヲ要ス[illegible]

女帝ノ配偶[illegible]

第八條　女帝ハ皇族中ヨリ配偶ヲ擇ムヿヲ得

但即位ノ前ニ皇族ニアラサル者ニ配シタル場合ハ此限ニアラス[illegible]

第九條　女帝ノ配偶ハ帝權ニ干與スルヿヲ得ス[illegible]

[illegible]攝政[illegible]

第十條　皇帝ハ滿十八歲ニ至ラサレハ未成年トス[illegible]

第十一條　皇帝未成年ノ間ハ攝政官ヲ置クヘシ

第十二條　成年ノ皇帝ト雖ヒ政ヲ親ラスル能ハサル事故アリテ國會其事實ヲ認メタル時ハ其事故ノ存スル間亦攝政官ヲ置クヘシ[illegible]

第十三條　攝政官ハ皇帝若クハ內閣宰相之ヲ皇族近親ノ中ヨリ指名シ國會三分二以上ノ可決ヲ得ルヿヲ要ス[illegible]

第十四條　成年ノ皇帝政ヲ親ラスル能ハサル場合ニ於テ皇帝ノ相續者既ニ滿十八年ニ至ルトキハ攝政官ニ任ス此場合ニ於テハ皇帝若クハ內閣宰相ヨリ國會ニ通知スルニ止リテ其議ニ附

スルヲ要セズ

第十五條　嗣帝未成年ノ場合ニ於テ皇帝親ラ嗣帝ノ爲メニ豫メ攝政官ヲ指定シテ之ヲ國會ノ決議ニ附スルヲ得

第十六條　攝政官ハ其在官ノ間名爵及ヒ儀仗ニ關スルノ外皇帝ノ權利ヲ受用ス

第十七條　攝政官ノ年齡ハ宮內省ノ年額ヨリ支給ス

皇帝ノ權利

第十八條　皇帝ハ神聖ニシテ責任ナシ

第十九條　皇帝ハ立法行政司法ノ權ヲ總統ス

第二十條　皇帝ハ定期若シクハ臨時ニ國會ヲ召集シテ之ヲ開キ之ヲ閉ヲ若シクハ之ヲ解散スルノ權アリ

但國會ヲ解散スルノ後三ケ月內ニ新タナル國會ヲ召集セサ

ル可ラズ

第廿一條　皇帝ハ議案ヲ國會ニ付シ之ヲ允可シ若シクハ之ヲ拒否スルノ權アリ

但歲入豫算表ノ外租稅ニ關スル議案ヲ國會ニ附スルノ權ナシ

第二十二條　皇帝ハ法律ノ施行ヲ停止スルヿヲ得ズ

第二十三條　皇帝ハ宰相及ヒ諸省ノ長次官地方長官海陸軍ノ將官幷ニ裁判官ヲ任免ス

但終身官ハ法律ニ定メタル場合ノ外ハ之ヲ免スルヿヲ得ス

第二十四條　皇帝ハ陸海軍ヲ總督ス

第二十五條　皇帝ハ戰ヲ宣シ和ヲ講ズ

但卽時ニ之ヲ國會ニ通知スベシ

第二十六條　皇帝ハ外國派遣ノ使節諸公使及ヒ領事ヲ任免ズ

第二十七條　皇帝ハ外國ト諸般ノ條約ヲ爲ス

但國財ヲ費シ若シハ國强ヲ變改スルノ條約ハ國會ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ其効力ヲ有セス

第二十八條　皇帝ハ通貨ヲ製造シ改造ス

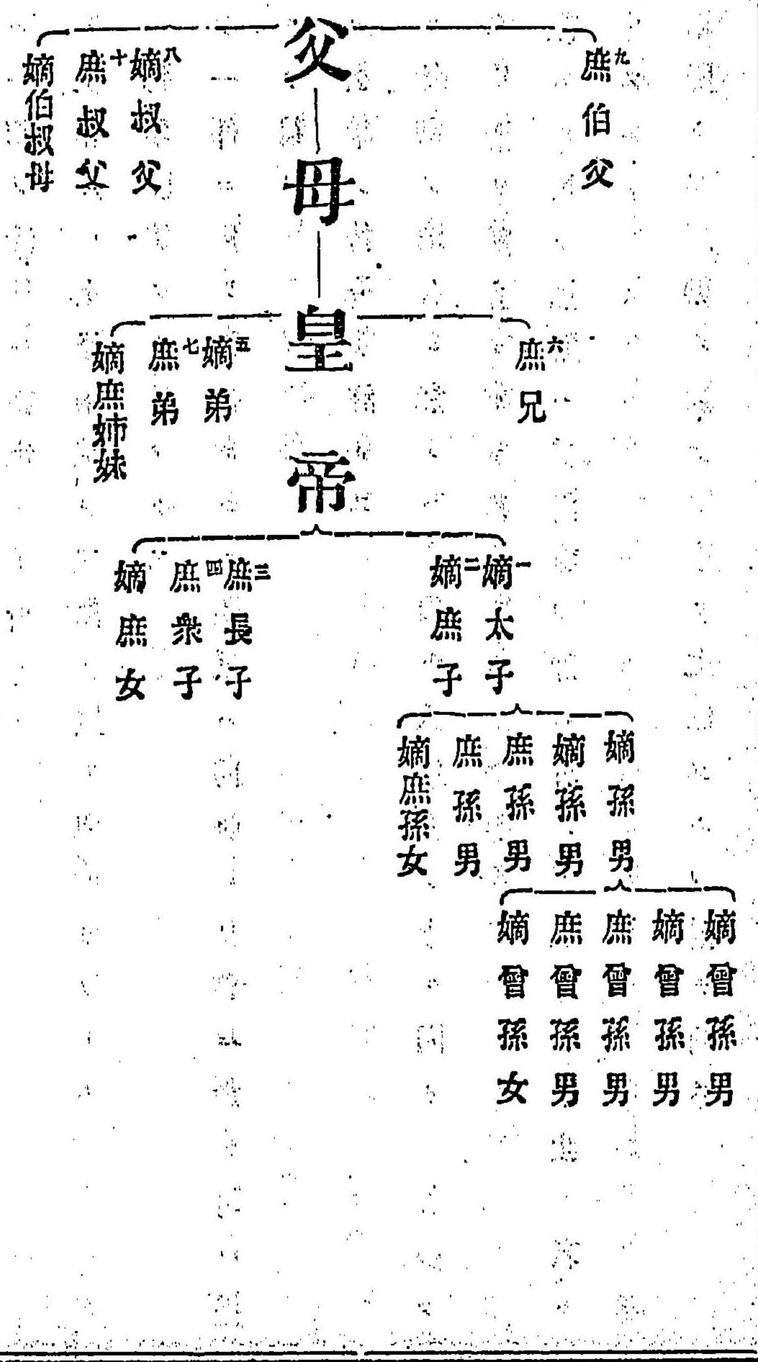
第二十九條　皇帝ハ爵位勳章ヲ與ヘ恩賜金ヲ授與ス

第三十條　皇帝ハ義務ナキ外國ノ勳章ヲ受ルヿヲ得

第三十一條　皇帝ハ特命ヲ以テ既定宣告ノ刑事裁判ヲ破毀シ何レノ裁判廳ニモ之ヲ移シテ復審セシムルノ權アリ

第三十二條　皇帝ハ刑罰ヲ減等及ヒ赦免スルノ權アリ

第三十三條　公罪ヲ犯ス者ハ皇帝ノ名稱ヲ以テ之ヲ追捕シ求刑シ所斷ス



國會

國會ハ一切ノ法律ヲ議定スル所トス

國會ハ天皇及ヒ上下兩院ノ三部ヲ以テ成ルモノトス

國會ハ毎年開集スルモノトス

國會ノ一部ニ於テ否拒シタル法案ハ同時ノ集會ニ於テ再ヒ提出スルヲ得ス

國會ハ公衆ノ傍聽ヲ許ルス

但シ特別ノ場合ニ於テハ議員十人以上ノ求ニ因リテ各院ノ議長傍聽ヲ禁止スルヲ得

兩院議スル所ノ法案ハ其討議ノ際ニ於テ天皇之ヲ中止シ若シハ禁止スルヲ得ズ

上下兩院トモ規則ヲ設ケ院事ヲ處置スルノ權ヲ有ス

下院

下院ハ法律ニ定メタル選舉區ニ於テ選舉シタル代議員ヨリ成ル

下院ノ議員ハ各選舉區ヨリ一名以上ヲ出サシム

議員ノ任期ハ滿三ヶ年トス

但シ幾任期モ重選セラルヽヲ得

日本人民ニシテ政權民權ヲ享有スル二十五歲以上ノ男子ニシテ定格ノ財產ヲ所有スルモノハ選舉法ニ遵ヒテ議員ニ選舉セラルヽヲ得

議員ハ全國民ノ代議員トス故ニ選舉人ノ敎令ヲ受クルヲ要セズ

下院ハ日本帝國ノ財政ニ關スル方案ヲ起草スルノ特權ヲ有ス

下院ハ政事上ノ非違アリト認メタル官吏ヲ上院ニ彈劾スルノ權アリ

下院ハ緊要ナル調査ニ關シ官吏並ニ人民ヲ召喚スルノ權アリ

下院ハ議員ノ身上ニ關シ左ノ事項ヲ處斷スルノ權ヲ有ス

議員下院ノ命令規則若シクハ特權ニ違背スルモノ

議員選擧ニ關スル訴訟

下院ハ其正副議長ヲ議員中ヨリ選擧シテ皇帝ノ制可ヲ請フベシ

下院ノ議員ハ院中ニ於テ爲シタル討論演說ノ爲ニ裁判ニ訴告ヲ受クルコトナシ

議員ハ會期中及ヒ會期ノ前後二十日間民事訴訟ヲ受クルコトアルモ答辨スルヲ要セズ

但シ下院ノ承認ヲ得ルトキハ此限ニアラズ

下院ノ議員ハ現行犯ニ非ラザレバ下院ノ承認ヲ得ズシテ會期中及會期ノ前後二十日間拘致セラルヽコトナシ

但シ現行犯罪ノ場合ニ於テモ即時ニ裁判所ヨリ議員ヲ拿捕セシコトヲ通知スベシ

下院ハ請求シテ會期中及ヒ會期ノ前後二十日間議員ノ治罪拘引ヲ停止セシムルノ權アリ

議長ハ院中ノ官員ヲ任免スルノ權アリ

第四條　上院ハ

第一條　上院ハ皇帝陛下ノ特命ニ因ツテ任セラレタル議員ヨリ成ル

第二條　上院ノ議員ハ定員五十八トス

第三條　上院議員ノ任期ハ十年トシ五年毎ニ其議員ノ半ヲ改任ス

但滿期ノ後モ重任セラルヽヲ得

第四條　上院ノ議員ハ日本人民ノ年齡三十五歲以上ニシテ左ノ性格ヲ具フルモノニ限ル

第一　皇族華族

第二　國家ニ大功勞アリシ者

第三　三等官以上ニ任セラレシ者

第四　地方長官

第五　三度以上下院ノ議員ニ撰ハレシ者

右上院議員ニ任セラルヽ性格ハ法律ニ因リ修正スルヲ得

第五條　上院ノ正副議長ハ皇帝陛下ノ特命ニ因リ議員中ヨリ任ス

第六條　上院ハ下院ノ彈劾シタル官吏ヲ審糺シ其有罪ト決シタル者ヲハ皇帝陛下ニ奏上シテ之ヲ免スルノ權ヲ有ス

第七條　上院議員ハ現行犯ニ非ザレハ上院ノ承認ヲ得スシテ之ヲ拘致スルヲ得ス

但現行犯罪ノ場合ニ於テモ即時ニ裁判所ヨリ議員ヲ拿捕セシヿヲ通知スベシ

國會ノ權利

第一條　國會ハ租稅ヲ賦課スルノ權利ヲ有ス

第二條　國會ハ內外ノ公債ヲ起スノ權利ヲ有ス

第三條　國會ハ國土ノ强域ヲ變更シ縣ヲ廢立分合シ其他ノ行政區畫ヲ定メルノ權利ヲ有ス

第四條　國會ハ國憲許ス所ノ權利ヲ施行スル爲メニ諸規則ヲ立ルノ權利ヲ有ス

第五條　國會ハ既往ニ溯ルノ法律ヲ立ツルヲ得ス

但シ舊法ヲ寛ニシ及ヒ契約ノ効ヲ動カサヽルモノハ此限ニアラス

國會ノ開閉

第一條　皇帝崩殂シテ國會ノ召集期ニ至ルモ之ヲ召集スル者無キトキハ國會自ラ參集シテ開會スルヿヲ得

第二條　國會ハ皇帝ノ崩殂ニ遭フモ嗣皇解散スルノ命アル迄ハ解散セズ定期ノ會議ヲ續クルヿヲ得

第三條　國會ノ閉期ニ當リテ次期ノ國會未ダ開カザル間皇帝崩殂スルヿアルトキハ議員自ラ參集シテ國會ヲ開クヿヲ得若シ

嗣皇之ヲ解散スルノ命アルニアラザレハ定期ノ會議ヲ續クルヿヲ得

第四條　議員ノ撰擧既ニ畢リ未ダ國會ヲ開カザル間皇帝ノ崩殂ニ遭テ國會ヲ開ク者ナキトキハ其議員自ラ參集シテ國會ヲ開クヿヲ得若シ嗣皇之ヲ解散スルヿ無レハ定期ノ會議ヲ續クルヿヲ得

第五條　國會ノ議員其年期既ニ尽キテ次期ノ議員未ダ撰擧セラレザル間ニ皇帝崩殂スルトキハ前期ノ議員集會シテ一期ノ會ヲ開クヿヲ得

第六條　各院ノ集會ハ同時ニシテ其一院集會シテ他院集會セザルトキハ國會ノ權利ヲ有セズ

第七條　各院議員ノ出席過半數ニ至ラザレハ會議ヲ開クヿヲ

得ズ

國憲ノ改正

第一條　憲法ヲ改正スルハ特別會議ニ於テスベシ

第二條　兩院ノ議員三分二ノ議決ヲ經テ皇帝之ヲ允可スルニアラザレハ特別會ヲ召集スルヿヲ得ズ特別會議員ノ召集及ビ撰舉ノ方法ハ都テ國會ニ同シ

第三條　特別會ヲ召集スルヿハ下院ハ散會スルモノトス

第四條　特別會ハ上院ノ議院及ビ國憲改正ノ爲メニ特ニ撰舉セラレタル人民ノ代議員ヨリ成ル

第五條　特別ニ撰舉セラレタル代議員三分二以上及ビ上院議員三分二以上ノ議決ヲ經テ皇帝之ヲ允可スルニアラザレハ憲法ヲ改正スルヿヲ得ズ

第六條　其特ニ召集ヲ要シタル事務畢ルヿハ特別會自ラ解散スルモノトス

第七條　特別會解散スルヿハ前ニ召集セラレタル國會ハ其定期ノ聯務ニ復スベシ

第八條　憲法ニアラザル總テノ法律ハ兩院出席ノ議員過半數ヲ以テ之ヲ決定ス

國民ノ權利

第一條　凡ソ日本人民タルモノハ法律上ニ於テ平等ノモノトス

第二條　日本ノ政權ヲ享有スルニハ日本國民タルヲ要ス

第三條　日本人民ハ文武ノ官吏タルヲ得

第四條　日本人民ハ法律ニ定メタル場合ニ於テ法律ニ定メタ

ル程式ニ據ルニ非レハ拘引招喚セラルヽコトナシ

第五條　日本人民ハ至當ノ賠償ヲ得ルニアラサレハ公益ノ爲ナリトモ其財産ヲ買上ラルヽコトナシ

第六條　日本人民ハ結社集會演說出版ノ自由ヲ享有ス

但シ法律ニ對シテ其責ニ任スヘシ

第七條　日本人民ハ皇帝及ヒ何レノ衙門ニ向テモ直接ニ乞願シ建言スルヲ得

第八條　日本人民ハ何ノ宗教タルヲ論セス信仰ノ自由ヲ得

第九條　日本人民ハ犯罪ノ場合ニ於テ法律ニ定ムル所ノ保釋ヲ受クルノ權アリ

第十條　日本人民ハ法律ニ定メタル場合ノ外夜中住家ヲ侵サルノ權ヲ有ス

行政官

第一條　皇帝ハ行政官ヲ總督ス

第二條　行政官ハ太政大臣及各省長官ヲ以テ成ル

第三條　行政官ハ合シテ內閣ヲ成シ以テ政務ヲ議シ分レテ諸省長官ト爲リ以テ當該ノ事務ヲ理ス

第四條　太政大臣ハ大藏卿ヲ兼テ諸省長官ノ首座ヲ占ムル者トス

第五條　太政大臣ハ皇帝ニ奏シテ內務以下諸省ノ長官ヲ任免スルノ權アリ

第六條　諸省長官ノ序次ハ左ノ如シ

大藏卿

內務卿

外務卿
司法卿
陸軍卿
海軍卿
工部卿
宮内卿
開拓卿

第七條　行政官ハ皇帝ノ欽命ヲ奉シテ政務ヲ執行スル者トス

第八條　行政官ハ執行スル所ノ政務ニ關シ議院ニ對シテ其責ニ任ズル者トス若シ其政務ニ就キ議院ノ信ヲ失スル時ハ其職ヲ辭スベシ

第九條　行政官ハ諸般ノ法案ヲ草シ議院ニ提出スルヲ得

第十條　行政官ハ毎歲國費ニ關スル議案ヲ草シ之ヲ議院ノ議ニ付スベシ

第十一條　行政官ハ毎歲國費決算書ヲ製シ之ヲ議院ニ報告スベシ

第十二條　行政官ハ上下兩院ノ議員ニ兼任スルヲ得

第十三條　諸般ノ布告ハ太政大臣ノ名ヲ署シ當該ノ諸省長官之ニ副署ス

明治十四年六月六日御届
仝　年仝月八日出版
〔定價拾五錢〕

編輯兼出版人　大坂府平民　片上菊治郎
當時兵庫縣神戸區神戸元町三丁目四百四十五番屋敷寄留

發賣　神戸元町三丁目　轉々堂

七文351

東京圖書館

函	門
架	部
號	類

禁複写

031580-000-3

特29-433

私擬国憲類纂

片上　菊次郎／編

M14

BBE-0201